

JICAの事業は終わったけど、VVK は終わらない
～引き続き迷走・暴走・爆走中のオバチャンたち～(Vol.3)

(2008年12月31日発行)

さて「その後のVVKオバチャン便り第2号」発行から1年が過ぎました。「その後のVVKオバチャン便り」ですが、隔月、いや季刊、それがダメなら半年に一度の発行を目指そう、と思いつつ、一年後の第3号発行となりました。(ただいま、12月31日午前11時インド時間)この1年間、いつお便りを皆さんにお送りしたのか、と思い悩んでいただけでなく、次のような活動もしておりました。

- ・スタッフをVVK事務所に定期的に派遣し活動をモニターするよう指示したり、
- ・月に2度のVVK執行委員会に出たり、
- ・4月と10月のVVK会員総会に出席したり、

と、オバチャン便りのネタには困らないくらいあれやこれや、と活動していたのですが、便りの発行に1年がかかってしまいました。

さて、この間、オバチャンたちのパフォーマンスを数字で示すと次の通り。

- 会員数:VVK設立直後の2005年度の約8倍に！(58人から463人に増加)
- 貯蓄総額:2年間で3倍に！(2006年度と2007年度の比較)
- ローン貸付額:2年間で約5倍に！(外部からの資本金の投入一切なし。貯蓄とローン返済のロテーションによる自己資金のみのローン貸付)
- 会員一人あたりのローン貸付額:2年間で約4倍に！(2006年度と2007年度の比較)
- 年間のローンを借りることができた人数:2年間で5倍に！(2006年度と2007年度の比較)

と、ここまで書くと「スゴイじゃん。オバチャンたち、銀行業がんばってるじゃない！！」と皆さん思われることでしょう。しかし、それじゃあ、面白くないのが「このオバチャン便り」。

もう少し、データにお付き合いいただくと。。。

- ローンを借りることができた人数:2006年度は、36人、2007年度は194人。人数だけ見れば、お金を借りる人数は増えているのですが、VVK総会員数のうち10から30パーセントのメンバーしかVVK銀行からお金を借りることができませんでした。
- それはなぜかという、累積する未返済金額。つまり、借りても返さない、あるいは素早く返済しない会員が多いため、70パーセント近くのメンバーがVVK銀行からお金を借りるのに、数年、待たなくてはいけないのが現状。

△ ▼その後のVVK オバチャン便り ▼△

そもそもVVK銀行を設立した当初「一度のローン金額はわずかでも、早く返済して、より多くのメンバーに何回もローンを貸し付けることができるようにしよう」というモットーがあったはず。そのモットーは、年とともに忘れ去られ、「借りるときはニコニコ顔、返す時は知らん顔」という状態。

ワタシ(※)、この12月、久しぶりにVVKスタッフと共にスラムを訪れた。

「アラ～、あんた久しぶりねー。どーしてたの？」と、馴染みのオバチャンに狭い路地で会う。

「ちょっとあれこれ出張やら別のプロジェクトが重なってね、なかなか来ることができなかったのよー」と、ワタクシ。

「いいところで会ったわ、ちょっとアンタ(一緒にいたVVKスタッフ)も一緒に来なさいよっ」
えらい鼻息の荒いオバチャン数名に囲まれて、連れていかれたあるVVKメンバーの家で。

「ちょっと聞いてよっ！VVKのスタッフ、ひどいのよ。先月の20日に、二人いるVVKスタッフのうちの一に、これまでたまっていたローンを返済したのよ。そしたら21日、翌日に、別のスタッフ、この人が(この日、ワタクシと一緒にいたVVKスタッフを指し)“アンタ、今日はちゃんとたまっていたローンを全額、返済してよ！”ってどなるのよ。じゃあ昨日、返済したお金はどーしたわけ?!」

「それに聞いてよっ!!」(また別のオバチャン)

「VVKスタッフなんて、アタシたちの都合のよい日に返済金額の回収に来なくて、スタッフの都合の良い日をアタシたちに押し付けるのよっ」

「まだあるわっ、VVK会員一人一人に渡している通帳を、スタッフが一時預からせてとって、事務所に持って行ったまま返してくれないのよ、どーゆーことなのっ」

「先月、アタシらのグループで140ルピーのVVKへの貯蓄をこのスタッフに払ったのよ。そしたらこのひと、今日は領収書を忘れたからって、その場で領収書くれないのよ。そもそも領収書忘れて、お金の回収に来るってひどいじゃない？」

「このスタッフなんて、アタシが勧誘したメンバーがVVKからお金を借りるとき、アタシに無断でローンを渡してしまうのよっ。アタシに一言声をかけてくれればいいじゃない！」

ここまでの会話。怒り狂ったオバチャンたち数名が、同時に話す。これ、これ、どこかで聞いたような…。2004年から2005年の「PCUR-LINK 便り」に毎月のように綴ったオバチャンたちの会話、そのままじゃん、とワタクシ。(詳しくは、ソムニードのブログ <http://somneed.seesaa.net/> にある「PCUR-LINK 便り」バックナンバーを参照)

相変わらず、一度に複数で、すごい勢いでまくしたてるスラムのオバチャンたち。フムフムと話を聞いているうちに、ワタクシのアドレナリンも高まってきて(こういう状況で高まるアドレナリンって何?!)、ひととおりのオバチャンたちの怒りを聞いたあと、今度はオバチャンたちを質問攻めにするワタクシ。

「スタッフがきちんと帳簿をつけていない(同じメンバーに違うスタッフが2日続けて、ローン返済を求める)という事実をどうして執行委員に先月中に言わないの？」

「このことを知っていた執行委員はスタッフに対して何かしたの？」

「……」(怒るオバチャンのうち一人は執行委員だった)

「スタッフには月に何回集金に来いというの？それで、自分で払うと言った日にアンタたちはちゃんとお金を用意してスタッフを待っているの？」

「……何度も足を運ばせて、やっぱり来月にして、というときもあるわ。」

「領収書もらえないのに、どうしてスタッフにお金を渡すの？」

「…それもそうだ。渡さなければよかった。」

「どうして一人一人の通帳をスタッフに渡してしまうの？それはダメ、ってどうして言わないの？」

「……事務所で記帳するからって言われたから、何も考えずに渡しちゃった」

「そもそも VVK に勧誘した人にいちいちローンを渡すたびに許可をとるなんていうルールがあるの？」

「……そんなルールないけど。一声かけてくれたって、ブツブツ」

次に、すぐそばで今月分の集金をしていたスタッフに向かって、質問するワタシ。

「ちょっとこの帳簿見せて。」

「次に、領収書を見せて。」

「領収書には総額しか書いてないけど、誰からいくら返済を受けたかどうやってわかるの？」

「何のために一人一人の通帳があるの？」

「どうして一人一人の通帳をここで書かずに事務所に持って帰って記入するの？」

「この通帳の数字はナニ？間違えたところは、二重線で訂正しないで、どうしてクチャクチャと上書きするの？」

「この貯蓄に対する利子だけど、1.05ルピーなの？それとも1.50ルピーなの？」(このスタッフ、小数点以下の記載方法を知らなかったことが判明)

VVKのスタッフは代変わりしていて、今年4月から新しいスタッフ2名がVVKの帳簿付けや集金などを担当していた。

新しいスタッフへの研修はソムニードのスタッフを通じて、定期的に行われていたが、スタッフのパフォーマンスを実際の現場で、ワタシが見たのは、この日が最初だった。

現場で、VVKメンバーがいる前で、質問攻めにしたので、怖がらしてしまったかも？と思ったのだが、帰り道、このスタッフはとてうれしそう。

「その場でどうしたらよいか言ってくれて、しかも私がちゃんと領収書や帳簿を書くことができるまで見ていてくれて、とてうれしかったです。また一緒に来てください！！」

その後 VVK 事務所に戻ると、今度は VVK スタッフの嘆きが。。。

「ローンの返済金額の集金や毎月の貯蓄の集金に行くと、VVKのメンバーたち、ひどいんです。15日に来て、と電話で連絡があったから15日に行くと、今度は22日に来て、と言い、22日に行くと、

来月にして、と。こんな感じで一つのところに月に 2 回も 3 回も足を運んでも、集金できないんです。」

「それに執行委員のメンバーもひどいんです。月に 2 回の執行委員会もしょっちゅうキャンセルして、だれも私たちの悩みを聞いてくれないんです。そのくせ、ローン返済が悪いと、スタッフのせいにするんです。」

「それにローンを貸し出すときに、勧誘した人の許可をとらなくちゃいけないというルールなんてどこにもないのに、自分がいい格好したいという理由で、スタッフに文句を言うのです。」

VVK 設立当初のモットー「一度のローン貸付額は大きくなくても、少ない金額でも、早く返済して、より多くのメンバーに何回もローンを貸し付けることができるようにしよう」はどこへ？

2004 年から 3 年間、研修に研修を重ねてスタッフや代表メンバー（主に執行委員会）の間にあった「責任を持つ」という行動変化や正確な帳簿付けの成果は、新しい執行委員やスタッフには受け継がれないのか？

ソムニードのスタッフが現場（VVK 事務所ではなくスラム）に行かないとわずか 1 年で、ソムニードが介入する以前のオバチャンたちに戻ってしまうのか？

「自分たちで決めたルールに基づいて、自分たちの組織を責任を持って運営する」という気持ちは、一代限りのことで、新しく入ったスタッフや執行委員、新しい VVK 会員にしっかりと継承されてゆくものではない、ということを学んだワタン。

「自分たちで決めたルールに基づいて、自分たちの組織を責任を持って運営する」なんて、スラムのオバチャンたちの生まれて育ってきた環境には全くなかった新しいこと。

それを可能にするために 3 年間、集中して介入を続けてきたわけだが、それは「わずか」3 年のこと。他の事業もあり、100 パーセントの力で、VVK に介入することができず、定期的なフォローはしても、実際にスラムに足を運ぶことをしなかった結果が、この通り。

帳簿をきちんとつけられず「今月の未返済金額はいくら？」という質問の答えを出すのに 1 週間もかかる今の VVK スタッフ。

いつでも誰にきかれても即座に正確にお金の流れがわかるようにする最低限の帳簿づけが、「自分たちで決めたルールに基づいて、自分たちの組織を責任を持って運営する」ことの基本だった。それが他の組織と異なる VVK の売りだったはずだったのに、今ではすっかり VVK 会員の信用をなくしている VVK。

しかし全くヘナヘナになってもう VVK はつぶれてしまうのか？！、というとそうではなく……。なんだからだといっても自己資金だけで銀行を運営続けているし、きちんと総会も年に 2 回開くし、新規会員だって勧誘し続けているし、とできることもちゃんとある。

これから、やらねばならないことは盛りだくさんだが、まずは基本に立ち戻るべく VVK スタッフが帳簿をつけられるようにまずはしなければ、はああああ。

△▼その後のVVK オバチャン便り▼△

この続きは、オバチャン便り第4号(いつ発行?)をお楽しみに。

みなさんの新しい年のご活躍とご健康をお祈りして。

インド、ビシャカパトナムより

(注)

※VVK: 2005年に発足したビシャカパトナム市内スラムの女性によるSHG(10~20人の女性による貯蓄と小規模融資を行うグループ)が集まって作られた連合体組織。会員数は現在、約500名。ビシャカ・ワニタ・クランティの略称がVVK。

※ワタシ、この便りの筆者。2004年から2007年までの3年間、ソムニード-JICA 草の根技術協力事業ではプロジェクト・マネジャーを担当。当時は、プロマネという名前でオバチャン便りをお送りしていた。本名を原康子といい、NPO法人ソムニードの海外事業チーフコーディネーターとして、インド&ネパールの事業を担当。
